

こころの移植と再生

—豊かで貧しい時代の落とし穴—

山 根 寛

Mind Control and Coming Out
—The Trap of the Rich and Poor Times—

Hiroshi YAMANE

はじめに

医学の技術と身体機能に対するリハビリテーションにより、多くの人が病いや障害により失いかけた生きがい、あきらめかけた生きがいを再び生きる望みとして取りもどすことができるようになった。移植という医療の技術は、命の贈りものともいわれ脚光を浴びている。しかし、「からだの移植」は命という生きる望みをもたらすと同時に、新たな葛藤をもたらしている。それは「私は誰？私ってなに？」と、他者の身体によって生かされた自分に問いかける、自己同一性の揺らぎといえよう。

そして、国家間の争いが絶えなかった時代、「からだの移植」とは異なる視点から、「こころの移植」を考えた人たちがいた。精神の機能の揺らぎを利用した洗脳 Brain washing という思想や信念の移植である。時代が変わり、マインド・コントロールという新たな「こころの移植」が、さまざまな問題を引き起こしている。「こころの移植（マインド・コントロール）」とは何だろう。「こころの移植」は「からだの移植」のように可能なのだろうか。こころの移植は人にどのような免疫反応を引き起こすのだろうか。

豊か（物質）で貧しい（心、精神）時代の巧

妙な落とし穴、マインド・コントロールについて考える。

洗脳 Brain washing とは何か？

Brain washing は、朝鮮戦争中に米国人捕虜がうけた尋問と強制的教化に対する E. ハンターの造語である¹⁾。中国語の洗脳をそのまま英訳したもので、説得の強制的スタイルをいう。洗脳とは「個人の自由意志を破壊し、個人が抱いているものとは異なる新たな信念を強制的に注入する」ことといえる。

1. 洗脳の戦略

一般的に洗脳は、①解凍 unfreezing、②変革 change、③再凍結 refreezing という段階を追っておこなわれる²⁾。解凍とはこれまでその個人を支えてきた信念や思想を崩してしまうことである。そして信念や思想が崩され不安定になっている個人に、新たな情報をインプットし、信念や思想を変えてしまうことを変革という。その新たにインプットした情報をしっかりと固定させ、変換した信念や思想を維持することが再凍結である。

洗脳は、個人が身につけた信念やアイデンティティーを消去する心理学の「脱条件づけ conditioning」の応用にあたる。

2. 洗脳のテクニック

洗脳には、①環境のコントロールによるコミュニケーション操作、③自発性を促すような操作、④恥や罪の意識をもつことを是とする純粋性を要求する、④カタルシス効果を生む告白の儀式をおこなう、⑤新しい信念や思想を信じ込ませるための聖的・科学的雰囲気をもつ教義をもちいる、⑥「これは定説である」「解脱」などのようなシンプルで特殊な常套用語をもちいる、⑦何よりも教義を絶対的に優先する、⑧存在権の絶対的配分をおこなう、といったようなテクニックが駆使される³⁾。

洗脳は、実際には拘禁による感覚遮断や薬物や拷問、脅迫、自白などにより、外部刺激（外界情報）をコントロールして自らの判断ができなくなるほどの錯乱状態にまで陥れて、個人の精神構造を変えようとするものである。

3. 洗脳は効果があったのか

はたしてそのように強制的におこなわれる洗脳が、本当に人の心を入れ替えることができるのだろうか。これまでの実態調査^{2,3)}や研究⁴⁾によると、強制という手段からは明白な成果は見られず、多くの人が死亡したり、神経衰弱になったという。一次的に洗脳されたようにみえた人も、強制が解けると元に戻ることが多く、持続する人たちは、本来強制される内容に否定的ではなかった人たちであるという結果が出ている。しかし信念などを完全に変わってしまうことは困難であるが、拘禁などの感覚を遮断するような生理的ストレスが被暗示性を高めることに影響があるのは事実である。この感覚遮断の影響が現在の悪質な自己啓発セミナー⁵⁾や破壊的カルト集団によって利用されている。

マインド・コントロールとは何か？

洗脳と同じように、自分の思いどおりに人の

こころを操ろうとする方法が、マインド・コントロールである。洗脳とどこが同じで何が違うのだろうか。

1. 洗脳との違い

マインド・コントロールは、社会心理学の知識を利用した他者操作技術を応用したものである。すなわち、洗脳のような強制的な方法ではなく、他人から強制されているとか他人の影響をうけていると認識させないで、こちらの目的に応じた精神反応、行動を引き起こそうというものである。

マインド・コントロールの技術は、学習や教育、さまざまなトレーニングなどにもちいられる人の認知行動原理と同じであるため、良いマインド・コントロールと悪いマインド・コントロールがあるという考えもある。しかし、一般的には「破壊的カルト」などのように何らかの詐術的な意味をもったものをマインド・コントロールという。適切なものはセルフ・コントロールなど本人に有用な心理学の応用をいう。

2. マインド・コントロールの戦略

人が何か行動をするときには、自分の五感を通してインプット（感覚）した外界の情報をそれまでの経験により蓄えられた記憶情報と照らし合わせ（知覚）、判断し（認知）、どのように行動するか自分の意志を決める（図1）。マインド・コントロールは、人が自分で何かをしようと思うこの「意志決定過程」をコントロールするものといえる。洗脳のように自分の意志に反して強制されたという思いがなく、自分の意志で、自ら望んでおこなったように思わせてしまう。それがマインド・コントロールの戦略である。

人は自分の意志決定において、ある状況の影響を受けやすい（自動反応）といった人の心理

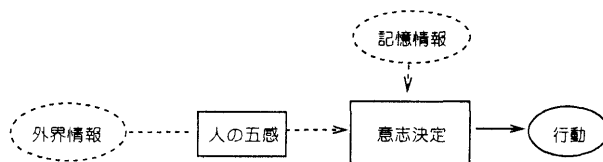


図1 マインドコントロールの戦略

の特性が利用されている⁶⁾。自動反応は、

①何かをもらったり、最初に提示されたことを譲歩されたりすると、お返ししなければという気持ちがおきやすい（返報性）。

②小さな要求を受け入れると、自己の内部矛盾を嫌うため、追加された要求も受け入れやすい、と同時に受け入れることで一貫した態度をとり認められたいと思う気持ちがさらにそれを強化する（コミットメントと一貫性）。

③人は好意を示されると好意的に応えようとする（好意性）。

④「これしかない」、「今しかない」「あなただけ」などの希少価値に惹かれる（希少性）。

⑤権威づけられたモノやコトに弱い（権威性）。

⑥周囲の者を利用して自分の周りの現象を証明しようとする（社会的証明）

といったような人の心理により引き起こされる。

3. 破壊的カルトのテクニック

社会心理学の応用といわれるが、マインド・コントロールは人の自動反応の利用とともに、どのようなテクニックをもちいて、意志決定過程のコントロールをするのだろうか。破壊的カルトにおけるマインド・コントロールでは、①情報のコントロール、②感情のコントロール、③行動のコントロール、④生活のコントロールがおこなわれる⁷⁻¹⁰⁾（図2）。

1) 情報のコントロール

人が何か行動をするときには、自分の五感を通してインプット（感覚）した外界の情報をそれまでの経験により蓄えられた記憶情報と照らし合わせ（知覚）、判断し（認知）、どのように行動するか自分の意志を決める。マインド・コントロールでは、この外界情報や記憶情報をコントロールすることで、ある一定の意志決定をさせる方法がとられる。たとえ情報をコントロールされたとしても、意志決定は個人がおこなうものであるから、人は自分で考えて決めたと思ってしまう。この意志決定の部分を本人に任せるということが、拘禁による感覚遮断や薬物や拷問、脅迫、自白などにより意志の決定を強制する洗脳とは異なる点である。

外部からの情報のコントロールは、特定の目立つ情報を繰り返し与え、集団で行動したり生活し、自由に判断する機会をなくすことで外部情報を遮断し、特定の人物の考えを繰り返しつたえるといったことでなされる。また破壊的カルト集団では、カリスマ性を高めた特定の人物が、いろいろな社会現象を特定の考えに基づいて理由づけし、関連する現象の予言をすることなどおこなわれる。さらに外部からの情報をコントロールすることにより自責感や恐怖感をあおったり、優越感などを利用して感情を操作することがおこなわれる。

記憶情報のコントロールは、人の主観的判断のあいまいさを利用しておこなわれる。先入観によってまだ会ったことがない人物のイメージ

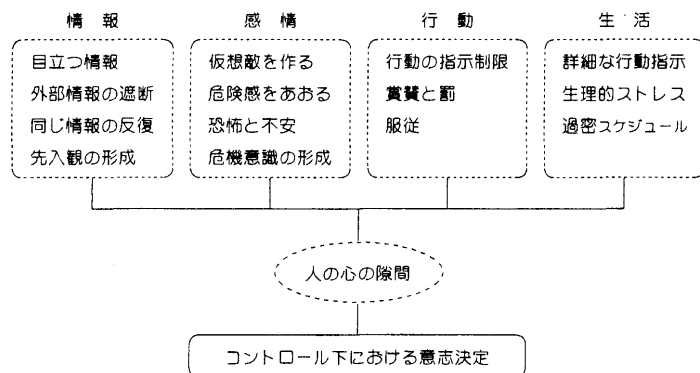


図2 マインド・コントロールのテクニック

がある程度作られると、その人物に出会ったときその先入観により判断が影響をうけることと同じである。次の判断に影響を与えるような記憶情報を、あらかじめある前情報を与えることで作るという手段がとられる。これまでの記憶情報を消失させたり入れ替えたりができるわけではないが、人が先入観に固執しやすいということを利用したものである。

2) 感情のコントロール

破壊的カルト集団などでは、仮想敵を作り自分たちが攻撃の対象になっているという不安をもたせたり、集団から離れることの危険や恐怖を植え付けることで自集団の凝集性を高める。外部情報のコントロールによる感情のコントロールである。集団から抜けることに対して特別な罰が与えられる場合も多い。真の宗教は人に救いと安心感を与えるが、破壊的カルトは恐怖と不安により自分で判断するゆとりや行動の選択の機会を失わせ、集団の個人を同一化させるという方法がとられる。

3) 行動のコントロール

マインド・コントロールをおこなっている組織のメンバーの行動は、賞賛されるか、罰せられるかのいずれかにより、組織への服従が条件づけられていく。組織の指示にそった行動をとるときには賞賛をうけ、階層構造を持つ集団の中で高い地位や特権が与えられたりする。組織の指示に反した行動をすると重い罰をうける。心理学のオペラント条件づけの悪用である。

そして時間や金銭、対人交流にも制限や機制があり、細かい指示によって行動のコントロールがなされる。それに従って行動することで、次第にそれまでの自分の信念や思想が揺らぎ、自分がとっている（本当はとらされている）役割に応じて変化し、服従的な行動をするようになる。

4) 生活のコントロール

マインド・コントロールを行っている組織内の生活は、自分で意志決定をする必要がないよう、詳細な行動の指示とともに、1日の生活スケジュールが決められていることが多い。そし

て多くは、組織内の特定の地位の者をのぞいて異性との感情的な交流が禁止され、食事や睡眠までもかなり制限された上に、生活スケジュールがびっしりと決められているため、自分で考えたり判断するというのをしなくなる。

豊かで貧しい時代の落とし穴

私たちの身のまわりには、破壊的カルトのような強力なマインドコントロールだけでなく、これがマインド・コントロールだとはわからない心理操作がたくさんある。たとえば、キャッチセールス、電話による商品販売、テレビのサブリミナルコマーシャルなどさまざまなメディアによる情報コントロールなどである¹²⁾。自分で判断し決定していると思わせながら、さまざまな情報のコントロールにより決定内容に方向づけがなされているといってもいいだろう。

1. プロイラー生活

暑い夏に（冷房が効きすぎて）寒いといってセーターを羽織り、ふる雨の一滴にも身体を濡らすことなく、マンションの玄関から会社まで、チューブのように外気を遮断した歩道と地下鉄で通い、包丁も火も使うことなく24時間いつでも飲み食いができる。直接手が触れ息づかいが聞こえるような対象とのかかわりもなく、電子のメールが入り電子のメールを送る。おもしろくないから、もう飽きたからと、リモコンで場面を切り替え、痛みも臭いも感じることなくカウチポットで人の死を見る。テレビ、ビデオ、パソコン、コンビニがあれば他人と話すこともなく、ときには何日も人間に会うことなく棲息できる、ありあまる豊かな物に囲まれた個人の努力を必要としない一見便利な現代の生活がある。

それは、少ない餌で短時間に効率よく肉を作り出すために、太陽の光を遮られ時間がくれば餌が流れてくる窓のない箱（ケージ）に容れられた、雑草をはみ、ミミズを探し走り回る苦勞も楽しみもない、元、鶏という名だった生きた鶏肉生産工場と化したプロイラーの生活と似ていないだろうか。

2. マインド・コントロールされやすい人

通常、人は私だけは大丈夫と思いがすが、そこに大きな落とし穴がある。マインド・コントロールは、人に対して申しわけないという気持ちを持ちやすい者、自分をよくみせたいという思いが強い者、人に嫌われたくない気持ちが何よりも先に立ちやすい者、権威に弱いといった気持ちが強い者ほど影響を受けやすい。また、時にはあふれる情報の中から自分に都合のよい情報によって、自分で社会的証明をおこなう者もいる。何かによりすがろうとする人の心理の一面といえる。

3. 豊かで貧しい時代の落とし穴

あまりにも物が豊かになることで、さまざまな対象との、ときには自分自身とのかかわりすら忘れてしまった生活がある。リモコン操作やスイッチのオンオフのように、自分の思い通りにはならない現象と対峙し、対象とかかわり、時期を待つことで達成される喜びや楽しみを失った（棄てた）生活がある。身のまわりにあるマインド・コントロールとは、そうした現代生活の中で、自分の足で歩き、人とかかわり、考え判断することを失ったプロイラー的人間にとっての、豊か（物質）で貧しい（心、精神）時代の巧妙な落とし穴といえる。

共に生きる、自分を生きる

洗脳、マインド・コントロール、適切なこちらのコントロールの境界はかなりあいまいなものである。私たちが、本当に自分の意志で決定し生きるためにはどのようにすればよいのだろうか。また、仮に洗脳やマインド・コントロールで自分のところを失った場合、どうすれば自分のところを取りもどすことができるのだろうか。どうすればその人たちのマインド・コントロールを解くことができるのだろうか。

その鍵となるのは、あまりにもあたりまえなことであるが、親子、夫婦、家族、友人など身近な人たちとの人間関係を、もう一度結びなおすことである。そして、私たちを取り囲む情報の問題と矛盾に気づくことであるという¹¹⁾。

ネオテニー化することで高い学習の可能性を秘めて誕生するようになった人間は、生きるということに関して、可能性と引き替えに、多くの社会生活における技能を学ばなければならない¹³⁾。それは身近な人や地域社会との関わりの中で身につくものである。少子・核家族化、一様序列化しながら上下のつながりや級友とのつながりを分断した入試教育など、私たちは人が生活の中でふれあうことでお互いの距離と対処を学ぶ機会を失っている。

豊か（物質）で貧しい（心、精神）時代の巧妙な落とし穴、マインド・コントロールに対する脆弱さは、豊かな物と人や自己との対峙の貧しさがもたらした脳の未学習による未熟な反応ともいえる。

ピアジェやブルが述べた他律→社会律→自律、客観的責任→主観的責任、前道徳→外的道徳→内的道徳、といった子供の道德性の発達段階は、視点を変えれば未熟な脳のまま生まれてくる人間の学習の必要性を表している。狭義の道德教育ということではなく、人や社会との関わりの中で身につける自律の学びの必要性ということである。

文 献

- 1) Hunter E: Brain-washing in Red China-the calculated destruction of men's minds. New York: Vanguard, 1951: 1-311
- 2) Edgar H, Schneier I, Baker CH: Coercive persuasion. A socio-psychological analysis of the "brainwashing" of American civilian prisoners by the Chinese Communists. New York, W.W. Norton, 1961: 1-320
- 3) Lifton RJ: 思想改造の心理；中国における洗脳の研究（小野泰博訳）。東京：誠信書房，1979：1-532
- 4) Vernon JA: 感覚遮断の研究；暗室のなかの世界（大熊輝雄訳）。東京：みすず書房，1969：1-206
- 5) 二澤雅喜，島田裕巳：洗脳体験〈増補版〉。東京：宝島社文庫，1998：1-285
- 6) 西田公昭：マインド・コントロールとは何か。東京：紀伊国屋書店，1995：1-246
- 7) Hassan S: マインド・コントロールの恐怖

- (浅見定雄訳). 東京：恒友出版, 1993 : 1-409
- 8) 西田公昭：ビリーフの形成と変化の機制についての研究 (1) 認知的矛盾の解決に及ぼす現実性の効果. 実験社会心理学研究, 1988 : 28, 65-71
- 9) 西田公昭：ビリーフの形成と変化の機制についての研究 (3) カルト・マインド・コントロールにみるビリーフ・システムの変容過程. 社会心理学研究, 1993 : 9, 131-144
- 10) 西田公昭：ビリーフの形成と変化の機制についての研究 (4) カルト・マインド・コントロールにみるビリーフ・システムの強化・維持の分析. 社会心理学研究, 1995 : 11, 18-29
- 11) Ross JC, Langone MD : カルト教団からわが子を守る法 (多賀幹子訳). 東京：朝日新聞社, 1995 : 1-270
- 12) 下條信輔：サブリミナル・マインド. 東京：中公親書, 1996 : 1-303
- 13) 山根 寛：ひとと作業・作業活動. 東京：三輪書店, 1999 : 1-167